

7月予報（全21枚）

病防第19号

令和7年（2025年）6月26日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第4号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第4号（7月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）6月19日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	10	80
	降水量	50	30	20
	日照時間	20	30	50

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期水稻	穂いもち	やや少	やや少	やや少(－)	並(±)	気温高(－) 降水少(－)	巡回調査, 防除員報告 (葉いもち)
	斑点米 カメムシ類	やや多	やや少	－	並(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市多(+)
早植え水稻	葉いもち	やや少	やや少	やや少(－)	並～少 (±)	気温高(－) 降水少(－)	
普通期水稻	葉いもち	並	並	並(±)	やや多～ やや少 (±)	気温高(－) 降水少(－)	防除員報告 (苗いもち)
早植え・ 普通期水稻	トビイロ ウンカ	並	並	早植え 並(±)	早植え 並(±)	気温高(+)	予察灯調査 合志市並(±)
茶	炭疽病	やや少	やや多	やや少(－)	並(±)	気温高(+) 降水少(－)	
	カンザワ ハダニ	並	並	やや少(－)	やや多～ やや少(±)	気温高(+) 降水少(+)	ほ場調査 茶業研究所 少(－)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや少(－)	やや多～ 並(±)	気温高(+) 降水少(+)	ほ場調査 茶業研究所 やや少(－)

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少	やや少(－)	やや多～並(±)	気温高(+) 降水少(+)	フェロモントラップ [°] 合志市 少 御船町 少 (－)
	クワシロカイガラムシ	やや少	並	少(－)	並(±)	気温高(+) 降水少(+)	
カンキツ	黒点病	並	やや多	並(±)	並(±)	降水少(－)	果樹研究所 多(+)
	そうか病	やや少	やや少	やや少(－)	並(±)	気温高(－) 降水少(－)	果樹研究所 やや多(+)
	かいよう病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	果樹研究所 やや多(+)
	ミカンハダニ	少	少	少(－)	並～少 (±)	気温高(+) 降水少(+)	果樹研究所 少(－)
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並(±)	並～少 (±)	気温高(+) 降水少(+)	トラップ調査 熊本市 少(－)
ナシ	黒星病	少	並	少(－)	並～やや少 (±)	気温高(－) 降水少(－)	
果樹全般	カメムシ類	少	少	－	並～少 (±)	気温高(+)	予察灯調査 宇城市 少 天草市 少 (－)
夏秋トマト	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	
	葉かび病	やや少	並	やや少(－)	並(±)	気温高(－) 降水少(－)	
	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水少(－)	
	うどんこ病	並	やや少	やや少(－)	並(±)	降水少(+)	
イチゴ育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	
	うどんこ病	多	多	多(+)	やや多(+)	気温高(－) 降水少(+)	
	ハダニ類	やや少	少	やや少(－)	並(±)	気温高(+)	
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	並	－	やや多～並 (+)	降水少(－)	
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	並	並	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト 並～やや少 (－)	気温高(+)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	—	夏秋ナス, 夏秋キュウリ 並 (±)	気温高(+)	
	アザミウマ類	並	並	—	夏秋ナス 並 夏秋キュウリ やや多～並 (±)	気温高(+)	
野菜類全般	オオタバコガ	やや多	やや多	夏秋トマト 並(±)	夏秋トマト, 夏秋ナス, 夏秋キャベツ , キク 並 (±)	気温高(+)	フェロモン トラップ調査 合志市 並 阿蘇市 並 山都町 多 八代市 多 (+)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早期水稻

1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

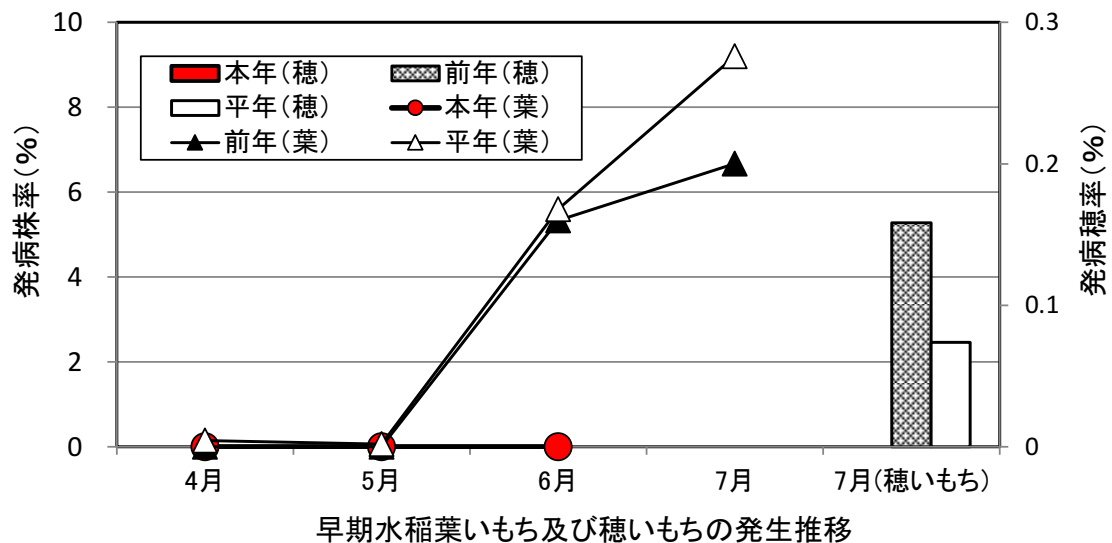
ア 6月の巡回調査（葉いもち）では、発病株は認められず（発病株率平年 5.6%、発病度平年 1.6%）、平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、出穂前に予防防除を徹底する。

イ ほ場を観察し、穂いもちの伝染源となる上位3葉に葉いもちの病斑が見られる場合は速やかに防除を行う。

ウ 葉いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期～穂揃い期に防除を行う。なお、防除後に降雨が続く場合は、穂揃い期の7～10日後に追加防除を行う。



早期水稻葉いもち及び穂いもちの発生推移

2) 斑点米カメムシ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 合志市に設置した予察灯による6月第1～4半旬の誘殺数は10.0頭（平年1.4頭）と平年比多であった（＋）。

(3) 対策

ア 畦畔など周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するため水稻出穂後には行わない。

イ 防除適期は、穂揃い期とその7～10日後（乳熟期）である。2回の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、穂揃い期の14～20日後（糊熟期）に追加防除を行う。



◎早植え水稻

1) 葉いもち

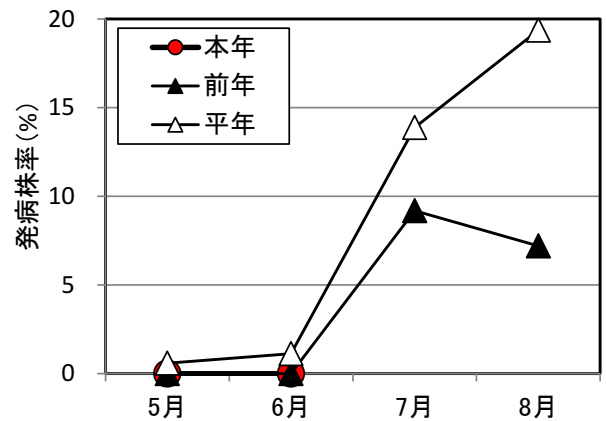
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病株は認められず（発病株率平年1.0%、発病度平年0.3%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページ<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>参照）を参考に、早期発見に努める。



早植え水稻葉いもち発病株率の推移

◎普通期水稻

1) 葉いもち

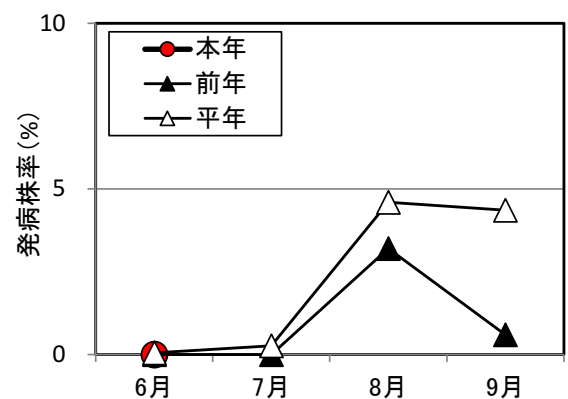
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病株は認められず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア ほ場を観察し、発生初期に薬剤防除を行う。特に、いもち病に効果のある箱施薬剤を使用していないほ場では、いもち病発生予測システム（BLASTAM）の感染好適日（病害虫防除所のホームページ参照）を参考に、早期発見に努める。



普通期水稻葉いもち発病株率の推移

イ 補植用の置き苗は、本田での伝染源となるので、補植が終わったらただちに処分する。

◎早植え・普通期水稻

1) トビイロウンカ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査（早植え水稻）では、寄生は認められず（平年0.0頭/株）、平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる5月第5半旬～6月第4半旬の誘殺は認められず（平年1.1頭）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 水田における発生状況を払落し調査などにより確認する。成幼虫数が要防除密度（7月下旬～8月上旬 20頭/100株）を超える場合は防除を行う。

イ 箱施薬剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。

ウ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。



◎茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

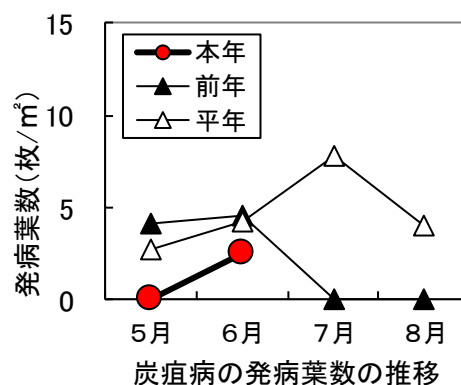
ア 6月の巡回調査では、発病葉数 2.5 葉/㎡(平年 4.2 葉/㎡)と平年比やや少の発生であった(一)。

(3) 対策

ア 摘採残葉に発病が見られる場合は、三番茶萌芽期から開葉期に防除を行う。

イ 三番茶を収穫しない園では、二番茶摘採後になるべく早く深刈り、浅刈り等によりり病葉の除去に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、寄生葉率 0.8% (平年 2.0%)と平年比やや少の発生であった(一)。

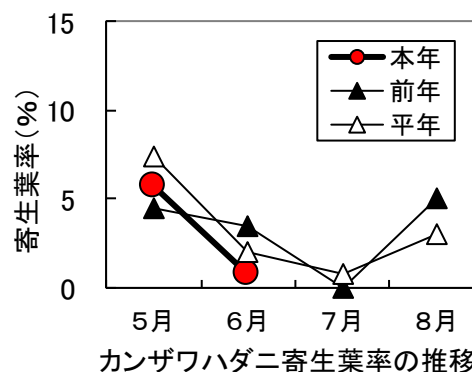
イ 茶業研究所(御船町)の6月第4半旬の調査では、寄生葉率 1.0% (平年 8.0%)と平年比少の発生であった(一)。

(3) 対策

ア 発生密度が高い場合は、収穫前使用日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 摘採直前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、寄生葉率 1.0% (平年 3.0%)と平年比やや少の発生であった(一)。

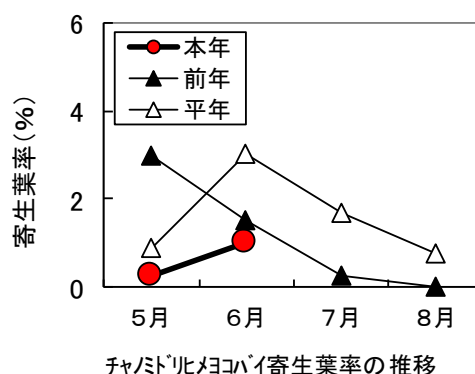
イ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、6月第4半旬の捕獲頭数が 11頭/10ヶ所(平年 23頭/10ヶ所)と平年比やや少の発生であった(一)。

ウ 6月19日福岡管区気象台発表の九州北部1ヶ月予報では、向こう1ヶ月の気温は平年比高(+)、降水量は平年比少(+)の予想である。

(3) 対策

ア 摘採残葉や遅れ芽を加害し、次茶期の発生源となるため、摘採後に防除を行う。

イ 発生が多いほ場では、他の害虫との同時防除ではなく、ヨコバイを対象とした追加的な防除を行う。



4) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

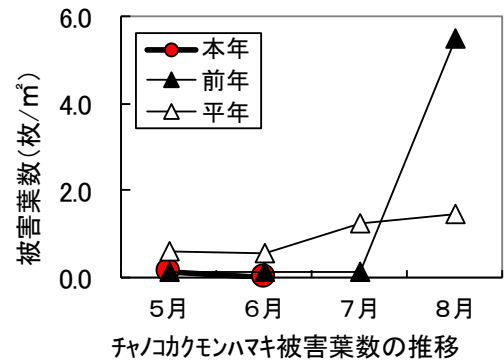
ア 6月の巡回調査では、被害が認められず（平年被害葉数0.6葉/㎡）、平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査では、6月第1～3半旬の捕獲頭数が、合志市は17頭（平年156頭）と平年比少、御船町は41頭（平年137頭）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 各茶期の摘採直後に若齢幼虫をねらい防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



5) クワシロカイガラムシ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、寄生が認められず（平年寄生株率18.9%）、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 園内の発生状況をよく観察し、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）に防除する。

イ アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第二世代ふ化最盛日の予測では平年より1日～3日程度遅い予測であった（6月23日現在の気象データから算出）。今後の気温が平年より高く推移すると、ふ化最盛日が早まる可能性があるため、ほ場をよく観察し、防除時期を判断する。なお、最新の情報は病害虫防除所のホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参照する。

ウ 幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、苗木購入、育苗、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。

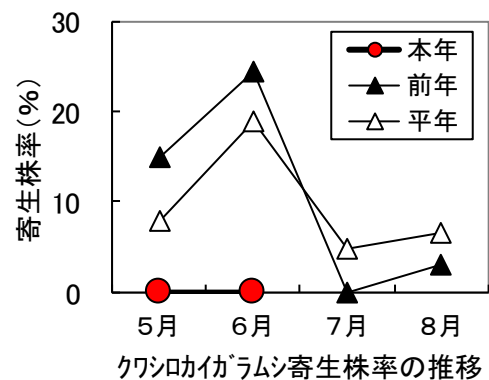


表 有効積算温度によるふ化最盛日予測

アメダス 地点名	第2世代		
	本年	平年(10年)	平年比
鹿 北	7月17日	7月14日	3日遅い
菊 池	7月9日	7月6日	3日遅い
甲 佐	7月9日	7月6日	3日遅い
水 俣	7月6日	7月5日	1日遅い
上	7月11日	7月10日	1日遅い

平年値は過去10年の気象データによる予測日平均



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎カンキツ

1) 黒点病

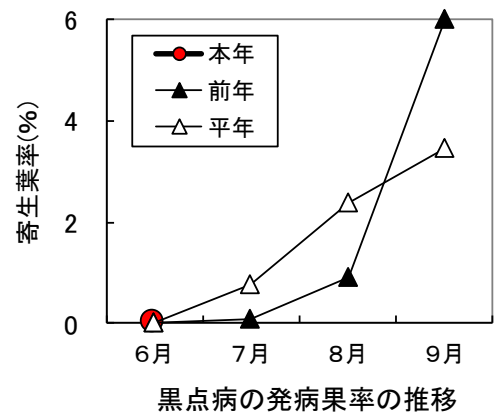
(1) 発生量：並

(2) 根拠

- ア 6月の巡回調査では、発病が認められず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場において、6月下旬の発病果率98.3%（平年55.1%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

- ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝はせん除する。また、せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。
イ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。



2) そうか病

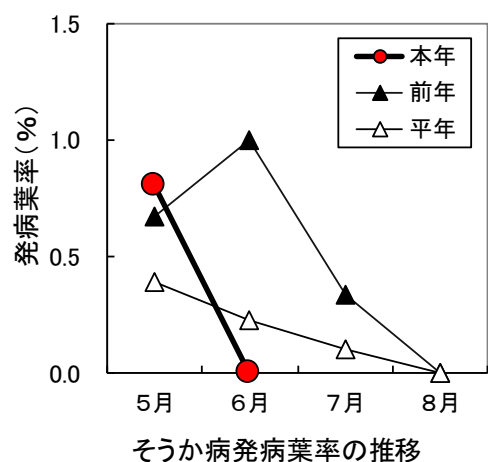
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

- ア 6月の巡回調査では、発病が認められず（平年発病葉率0.2%）、平年比やや少の発生であった（-）。
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、6月下旬に発病葉率86.5%（平年56.5%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

- ア 伝染源の量がその後の発生に大きく影響するので、病葉はできるだけせん除し、併せて園内の通風・採光を図り、雨露が早く乾くようにする。
イ 梅雨末期までの防除が有効であるため、時期を逃さないようにする。なお、果実での潜伏期間は好適条件下で10～15日である。
ウ 摘果時は、被害果の除去に努める。



3) かいよう病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病葉率1.4%（平年1.4%）と平年並の発生であった（±）。

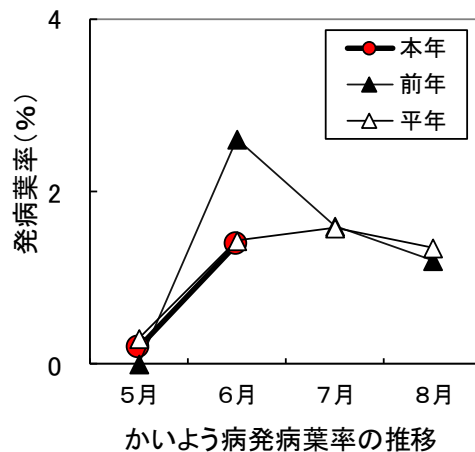
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、6月下旬の発病葉率13.7%（平年9.7%）と、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 伝染源となる発病葉や枝などのせん除や薬剤防除を徹底し、幼果への感染拡大を防止する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及びせん除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



4) ミカンハダニ

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率0.5%（平年11.7%）、寄生頭数0.1頭/10葉（平年4.6頭/10葉）と平年比少の発生であった（-）。

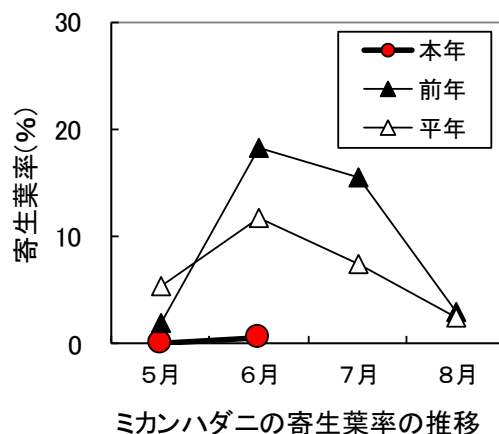
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、6月第4半旬に雌成虫の寄生葉率2.0%（平年22.9%）、寄生頭数0.3頭/10葉（平年5.3頭/10葉）と平年比少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または、寄生頭数が5～10頭/10葉に達したら防除を行う。

イ 多発ほ場ではマシン油乳剤を散布し、夏ダニの発生を予防する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



5) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 巡回調査では、被害果が認められず(被害果率平年0.0%)、平年並の発生であった(±)。

イ 熊本市河内町の粘着トラップ調査における6月第3半旬のトラップ1枚あたり捕獲数は0.1頭/日(平年0.3頭/日)と平年比少の発生であった(－)。

(3) 対策

ア 平年に比べ羽化最盛期が遅い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。なお、最新の情報は病虫害防除所のホームページ(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>)を参照する。

イ 発生調査は、果実(100果)を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。

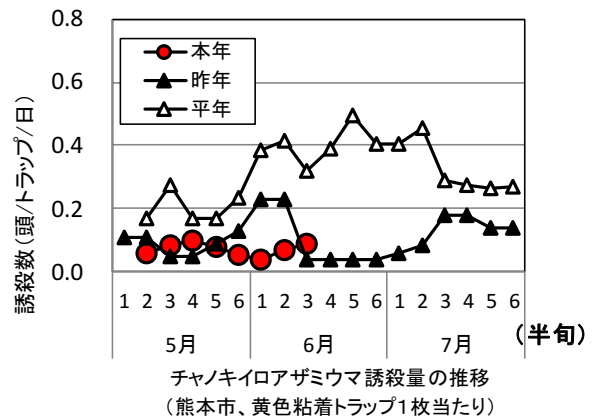


表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (6月23日現在)

地点名	本年		平年 (10年平均)		平年差	
	第3世代	第4世代	第3世代	第4世代	第3世代	第4世代
熊本	6月25日	7月14日	6月22日	7月11日	3日遅い	3日遅い
三角	7月1日	7月19日	6月27日	7月17日	4日遅い	2日遅い
本渡	7月1日	7月20日	7月1日	7月20日	0日	0日
八代	6月27日	7月16日	6月25日	7月14日	2日遅い	2日遅い
水俣	6月29日	7月18日	6月26日	7月16日	3日遅い	2日遅い

◎ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病が認められず(平年1.3%)、平年比少の発生であった(－)。

(3) 対策

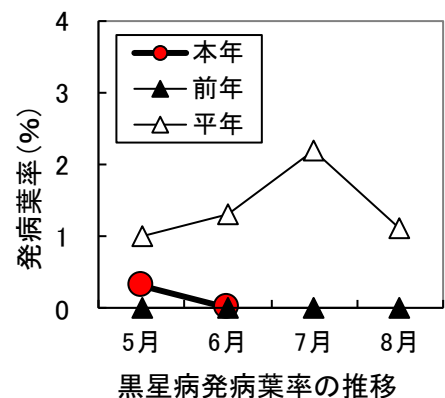
ア り病葉及び果実は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 「幸水」の果実は、開花60～85日後(6月上旬～7月上旬)に黒星病に対する感受性が再度高くなるため注意する。

ウ 保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。Q o I 剤 (FRACコード11) 及びS D H I 剤 (FRACコード7) の年間使用回数は2回までを基本とする。

オ 降雨が多いと発生が多くなるため、梅雨期の防除を徹底する。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 4月～6月中旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、各地点とも平年比少であった（一）。

表 4月～6月中旬の予察灯誘殺数合計

地点名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
合志市	12	194	6%	3	262	1%
宇城市	92	1,208	8%	187	3,342	6%
天草市	426	3,939	11%	455	3,165	14%

※合志市設置の予察灯は故障のため5月上旬～6月16日まで欠測した。

(3) 対策

ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを病虫害防除所のホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ ピレスロイド系殺虫剤（IRACコード3 A）は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。



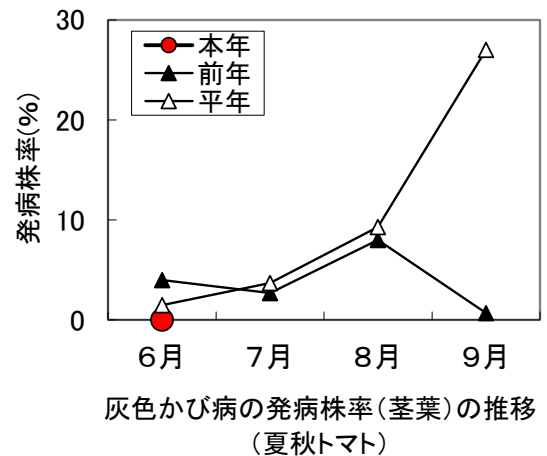
本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎夏秋トマト

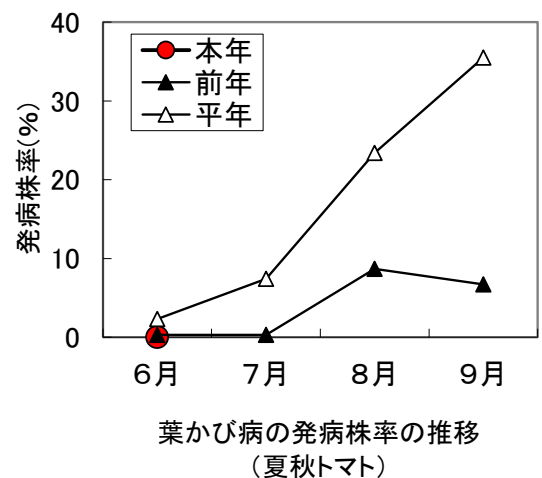
1) 灰色かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、発病株は確認されず（茎葉平年1.5%、果実平年0.2%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策
 - ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
 - イ 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。
 - ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



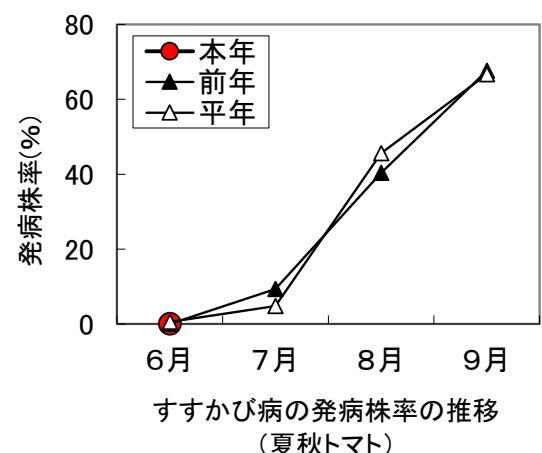
2) 葉かび病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年2.3%）、平年比やや少の発生であった（－）。
- (3) 対策
 - ア 抵抗性品種でも発病に注意する。
 - イ 肥料切れで多発するので、適正な肥培管理に努める。
 - ウ 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
 - エ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
 - オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
 - カ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



3) すすかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠
 - ア 6月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年0.5%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策
 - ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
 - イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
 - ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
 - エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



4) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病株は確認されず(平年3.1%)、平年比やや少の発生であった(－)。

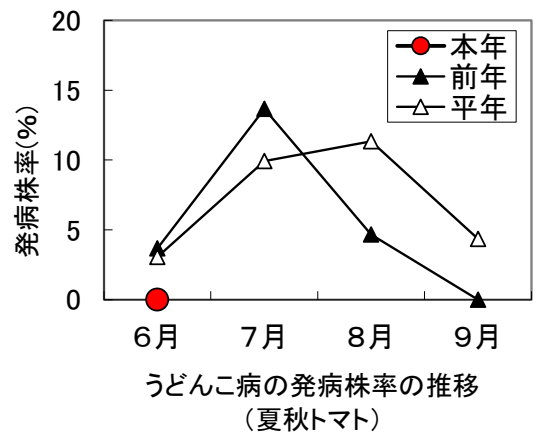
(3) 対策

ア 乾燥条件でよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないよう管理する。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ育苗ほ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、発病株は確認されず(平年0.0%)、平年並の発生であった(±)。

(3) 対策

ア 親株床、育苗床はビニールで雨よけをする(3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照)。

イ 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2) うどんこ病

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、一部のほ場で多発し、発病株率3.3%(平年0.5%)と平年比多の発生であった(+)

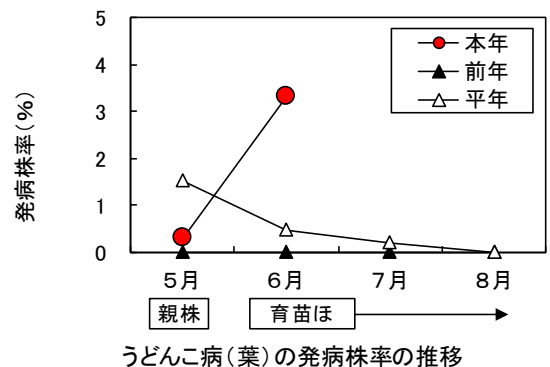
(3) 対策

ア 発生していないほ場でも定期的に防除を行い、発生前から予防防除を徹底する(3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照)。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、寄生葉率8.3%（平成21.8%）と平成比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

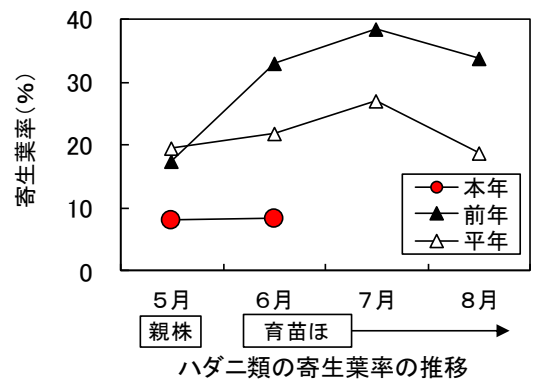
ア 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ばまでの栽培期間を通した防除計画を立て、気門封鎖剤等も利用しながら、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ その他詳細は、3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照する。



◎夏秋キュウリ（高冷地）

1) ベと病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の防除員報告では、平成比やや多～並の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、適正な肥培管理と排水に努め、過湿を避ける。

イ 多発生後は防除が困難なので予防防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎夏秋果菜類（高冷地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の夏秋トマトの巡回調査では、寄生葉率0.3%（平成1.2%）と平成並の発生であった（±）。

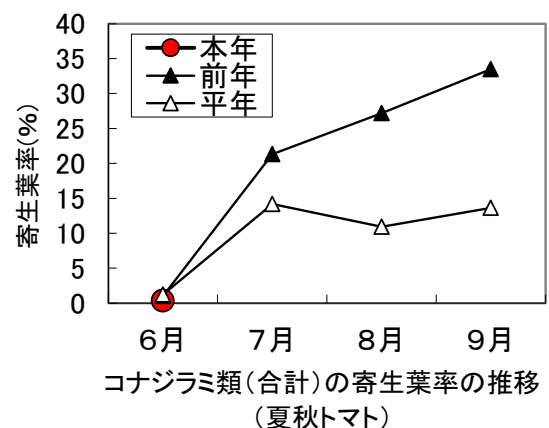
(3) 対策

ア 幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の防除員報告では、夏秋ナス、夏秋キュウリで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。現在発生しているほ場では、早急に防除する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤ローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 6月の防除員報告では、夏秋キュウリで平年比やや多〜並、夏秋ナスで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう**」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) オオタバコガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 6月の巡回調査では、夏秋トマトでは寄生株は確認されず（平成0.0%）、平成並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる6月第1～4半旬の誘殺数は、八代市・山都町で平成比多、合志市・阿蘇市で平成並であった（+）。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況（6月第1～4半旬）

市町村名（地域名）	本年（頭）	平成値（頭）	平成比（%）
合志市（栄）	52.5	42.6	123.3
八代市（鏡）	15.1	4.2	355.3
阿蘇市（一の宮）	5.0	4.3	117.0
山都町（鶴ヶ田）	20.0	9.8	203.7

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3 防除のポイント等

トビイロウンカの適期防除に努めましょう

水稻に「坪枯れ」等の被害を引き起こすトビイロウンカは、今後梅雨時期を中心に海外から断続的に飛来すると予想されます。箱施用剤の残効期間に留意し、飛来情報やほ場内の密度を定期的に把握することで、適期防除を行いましょう。

- (1) 若齢幼虫期が防除の適期となる。
- (2) 水田における発生状況を定期的に把握する。
- (3) 病虫害防除所が適時発表する飛来情報や防除適期情報 (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) を参考に、適期防除に努める。

ナシヒメシンクイ（ナシ）の防除対策について

既に幼果への被害が出始めており、今後果実が成熟してくると園地への侵入が増加するので、防除を徹底するとともに、被害果は放置せず園外に持ち出して処分しましょう。

第3世代の発生ピークは7月中・下旬（第4～5半旬）と予想されるため、特に甚大な被害が予想される無袋栽培では適期を逃さないよう防除を行いましょう。

また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行いましょう。



イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1 うどんこ病

梅雨時期は発病に好適となり、この時期に発生が多くなると秋期の発生が多くなります。本ほ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 発病葉および不要な下葉は早めに取り除き処分する。
- (2) 早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。
- (3) 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (5) 気温が高い夏期は病徴が見えにくくなるが、定期的に薬剤防除を行い、新葉への感染を防ぐ。

2 炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染及び苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 親株ほ、育苗ほは必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 親株ほ、育苗ほにはこれまで本病が発生していないほ場を選び、冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水にする。
- (4) ランナー発生前から予防的に薬剤防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3 ハダニ類

ほ場をよく観察するとともに、以下の防除対策を徹底し、育苗ほでの発生を防止しましょう。

<防除対策>

- (1) ほ場周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- (2) 除去した下葉や株は、ほ場周辺に放置せず適切に処分する。
- (3) 育苗ほでハダニ類の発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、卵に効果が低く、残効も短いので、約7日間隔で複数回散布する。



施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう

1 野菜のウイルス病まん延防止について

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

そこで、ウイルスを保毒した微小害虫のまん延を防止するため、栽培終了後に密閉処理を行い、まずは植物体を完全に枯らしましょう。さらに、10日以上処理を継続することで、確実に微小害虫を施設内で死滅させましょう。

◎密閉処理による微小害虫防除のポイント

- (1) 微小害虫（成虫）は、絶食状態では1日以内に死亡する。そこで、施設内の微小害虫を死滅させるため、施設内の雑草を除去し、作物を枯死させることで、植物を摂食できない状況を作る。
- (2) 施設内の微小害虫が施設外へ飛び出さないよう、施設は被覆ビニル等でしっかりと密閉する。
- (3) 密閉する日数は、害虫の習性や寄生部位等を考慮して決める。
 - ・コナジラミ類の終齢幼虫は、株が完全に枯死しないと生存、羽化する場合がある。
 - ・ミナミキイロアザミウマの蛹は、土の中にいて植物を摂食しないため、株の枯死と関係なく生存する。蛹期間が、20℃で約7日であるため、密閉処理は、植物体が完全に枯れてから10日以上続ける必要がある。
- (4) 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- (5) 密閉処理の途中で施設を開放すると、微小害虫が野外へ逃げ出すため、施設内の片付けは、密閉処理期間を過ぎた後に行う。

注1) 令和7年6月25日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
- ・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ

クロピクフローはメロン（漬物用メロン）には適用外

◎野良生えトマトの除去を徹底しましょう

密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早めに土中に埋めるなど適切に処分する。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作 物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
早期・ 早植え水稻	紋枯病	並	巡回調査は、平年並（±）。 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤防除を行う。 （要防除水準：穂ばらみ期の発病株率 20％）
早植え・ 普通期水稻	ツマグロ ヨコバイ	並	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる 5 月第 5 半旬 ～ 6 月第 4 半旬までの誘殺数は、平年比やや多（+）。
	ヒメトビ ウンカ	やや多	巡回調査は、平年比やや多（+）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる 5 月第 5 半旬 ～ 6 月第 4 半旬までの誘殺数は、平年比やや多（+）。
	セジロウンカ	やや多	巡回調査は、平年比やや多（+）。 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる 5 月第 5 半旬 ～ 6 月第 4 半旬までの誘殺数は、平年比やや多（+）。
	コブノメイガ	並	巡回調査は、平年並（±）。 合志市に設置したフェロモントラップによる 6 月第 1 ～ 4 半旬ま での誘殺数は、平年並（±）。 コブノメイガに効果のある箱施用剤を使用していない、もしくは感 受性低下が報告されている箱施用剤を使用しているほ場では、発生 に注意する。
茶	チャノキイロ アザミウマ	並	巡回調査では平年並（±）。 粘着トラップ調査では合志市で平年比少（－）。 新芽が加害されるため、萌芽～ 1 葉期に防除する。
	チャノホソガ	並	巡回調査では平年比やや多（+）。 フェロモントラップ調査では、合志市で平年比やや少、御船町で平 年比少（－）。 ほ場を見回り発蛾最盛期から 7 ～ 10 日後の若齢幼虫を対象に防除 を行う。
	ツマグロアオ カスミカメ	やや多	巡回調査では平年並（±）。 防除員報告では平年並（±）。 常発園、多発園では、萌芽期を重点に防除する。
カキ	炭疽病	並	防除員報告は平年比やや多～並（+） 梅雨期は発生が多く、まん延しやすい時期であるため、予防防除に 努める。
夏秋ナス （平坦地）	すすかび病	並	防除員報告では、平年並（±）。 適切な肥培管理を行う。
夏秋 キュウリ （高冷地）	うどんこ病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生を認めたら、直ちに薬剤散布を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

夏秋 キャベツ	黒腐病	並	防除員報告では、平年並（±）。 発生を認めたら、直ちに薬剤防除を行う。
	コナガ	並	防除員報告では、平年比やや多～並（+）。 フェロモントラップによる 6 月第 1～4 半旬の誘殺数は、阿蘇市、 山都町で平年比少（-）。 ジアミド系殺虫剤を使用したほ場で発生が認められた場合は、他系 統の薬剤で防除する。
野菜類全般	ハスモンヨ トウ	並	巡回調査では、イチゴで平年並（±）。 防除員報告では、アスパラガスで平年比やや多～やや少、夏秋トマ ト、夏秋ナス、イチゴ、キク、サトイモで平年並（±）。 フェロモントラップによる 6 月第 1～4 半旬の誘殺数は、阿蘇市、 山都町、八代市で平年並、合志市で平年比やや少（±）。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では防虫ネットで侵入を防ぐ。
【野菜病虫害の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL：096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」
上に掲載しています。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>